資料 10

授与式・選定記念フォーラム

「共創資産」を次代につなぐ、これからの暮らしづくり

（一部抜粋）

未来に残したい
草原の里
100選

開催場所　東京農業大学 横井講堂

開催日時　2023年10月12日(水) 13:00～17:00

主催　全国草原の里市町村連絡協議会
後援　環境省、農林水産省、東京農業大学
協力　公益財団法人 日本自然保護協会
一般社団法人 日本茅葺き文化協会
一般社団法人 全国草原再生ネットワーク

プログラム

オープニング（13:00〜13:25）

主催者挨拶　全国草原の里市町村連絡協議　会長　中村 義明
来賓挨拶　　東京農業大学　大林宏也様（地域環境科学部長）
　　環境省　則久雅司様　（自然環境計画課長）
　　農林水産省　村山直康様（農泊推進室長）
選考委員紹介

第一部「記念講演および認定書授与式」（13:30〜14:45）

記念講演「草原と茅葺きの 持続とその暮らし」
　　安藤邦廣（草原の里 100 選選考委員・筑波大学名誉教授）
認定書授与
記念写真撮影

第二部「記念フォーラム」（14:50〜16:45）

事例発表
①五箇山相倉茅場（相倉史跡保存顕彰会 中島仁司／富山県南砺市）
②鋏山（藤生区 星英雄／福島県南会津町）
③中瀬草原（株式会社中瀬草原キャンプ場 白石悦二／長崎県平戸市）
④菅平高原・峰の原高原
（根子岳・四阿山保全協議会 田中健太／長野県上田市、須坂市）
⑤玉原湿原（利根沼田自然を守る会 二川真士／群馬県沼田市）
⑥冬師湿原（鳥海山・飛島ジオパーク協議会 長船裕紀／秋田県にかほ市）
⑦霧ヶ峰
（霧ヶ峰自然環境保全協議会 土田勝義／長野県諏訪市、茅野市、下諏訪町）
総括コメント

クロージング（16:45〜17:00）

書籍の編集とクラウドファンディングの紹介（草原の里 100 選運営委員）
「第 14 回全国草原サミット・シンポジウム in おたり大会」の案内（小谷村）
2024 年募集の案内・閉会挨拶（草原の里 100 選運営委員長 高橋佳孝）

2023 年の選定

1　募集・選定経過

2022 年 10 月～ 2023 年 1 月　募集
2023 年 3 月　最終選考
2023 年 5 月　選定結果発表

2　選定対象となる「草原の里」

応募時点で実際に草原が存在している地域

3　応募対象者

日本国内に拠点を置き、草原と関わっている民間団体または地方自治体
民間団体が応募する場合には、地方公共団体の推薦が必要

4　審査基準

各地に残る「共創資産」を日本全体で共有し、活用していくことで、次世代に希望のある自然共生型の社会をつくるために、以下に例として示したような観点から、段階的な審査を行う。審査は有識者で構成する草原の里選考委員会が行う。

5　審査の観点

(1) 草原の自然
(2) 草原からのめぐみ
(3) 草原を維持するしくみや、価値を享受するしくみの良さ
(4) 共生型社会の実現に向けた波及効果（ロールモデルとしての期待）
(5) 草原に対する思いの強さ

6　2023年選考委員会

安藤 邦廣（筑波大学 名誉教授）
岩井 茂樹（静岡県東伊豆町長、全国草原の里市町村連絡協議会 会長）
河野 博子（ジャーナリスト、自然環境研究センター 理事）
高橋 佳孝（一般社団法人全国草原再生ネットワーク代表 理事）
長沢 裕（タレント、日本環境教育フォーラム 理事）
町田 怜子（東京農業大学地域創成科学科 教授）
湯本 貴和（京都大学 名誉教授・中部大学 客員教授・京都芸術大学 客員教授）
養老 孟司（東京大学名誉教授）

事例発表6　鳥海山の山体崩壊がもたらす草原と湿地の生物多様性：冬師湿原（秋田県にかほ市）：

冬師湿原は鳥海山（2236m）の秋田県側のなだらかな山麓に位置する。成因は約 2500 年前に発生した鳥海山の大規模な「山体崩壊」が関係しており、広範囲に押し寄せた“岩なだれ”が冬師湿原の基盤である。この岩なだれが冬師湿原の特異的な凹凸地形を構成しており、凹部は多様なコケ群落やミズバショウなどが見られる湿地帯で、地形を活かして造られたため池にも豊富な水生植物や希少な水生生物が確認されている。一方で凸部はススキ群落を主とする半自然草原で、全国的にも希少な草原性の昆虫や鳥類が確認されている。まさに冬師湿原は、生物多様性の保全上重要な環境といえる。

半自然草原は隣接する地区住民による“野焼き”で維持管理されており、5 ～ 6 月は観光ワラビ園が営まれている。しかし、地区住民の世帯数減少や高齢化が進行しており、360ha にも及ぶ冬師湿原の野焼きが将来的に継続できるか、不安が生じ始めている。2023 年現在、ボランティアの受け入れ等の制度はない。本 100 選選定が、冬師湿原の将来について考えるきっかけになればと考えている。

長船 裕紀（一般社団法人鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 研究員）

実家は岡山県の里地里山。“昆虫少年”兼“川ガキ”として育ちましたが、幼少期～ 20 代にかけて、新興住宅地や大都市圏にも住んだ経験が、自身の自然観を形成したと思っています。長年継承されてきた日本の生物文化多様性の再興にも関わりながら、自然共生社会の実現を目指している。

事例発表7　花々が彩る高原の草原をみんなで守る：霧ヶ峰（長野県諏訪市、茅野市、下諏訪町）

優美な起伏をもつ霧ヶ峰は標高 1550 ～ 1925m の高所にあり、その大部分は半自然草原である。草類の需要がなくなり採草、火入れが中止されたのは昭和 30 年代で、その後放置されていたため、いわゆる森林化が始まった。またススキやニッコウザサの過度な繁茂により生物多様性の低い草原となってきている。さらに十数年前からニホンジカが増え、草類やその花を食べるいわゆる食害が広がり、また国の天然記念物の 3 湿原も踏み荒らされるようになった。これらから花々が彩る草原を守り、再生するため国定公園を管理する長野県は 2007 年に地元の関係者等からなる霧ヶ峰自然環境保全協議会を設立し、地元市町とともに様々な課題に取り組んでいる。主なものは、①シカによる食害や踏み荒らしを防ぐ電気柵、防鹿柵の設置、②草原景観を維持するための雑木伐採、③多様な植物からなる草原の再生（動物の多様性も促す）のための草刈りとモニタリング、④外来植物の駆除とモニタリングなどである。今秋からこれらの見直しを行い、第 3 次の自然保全再生実施計画を策定する。

土田 勝義（霧ヶ峰自然環境保全協議会 座長/信州大学 名誉教授）

草原生態学の研究者として、隣接する美ヶ原とともに亜高山帯の特殊な草原植生を持つ霧ヶ峰に興味を持ち 40 年にわたって関わってきた。その間、北ア、中央アやヒマラヤ、チベットなど高所の草原研究に携わる。2007 年に協議会が設立され座長となり、草原の保護と再生に地元の皆さんと取り組んでいる。